

2017年1月1日

「起きよ、光を放て。あなたを照らす光は昇り、主の栄光はあなたの上に輝く。」 イザヤ60:1

昨年10月に、アライアンス世界連盟総会に参加して、世界の現実は決して明るくはないが（日本も！）、信仰を持って起き上がるべきだと教えられました。

バビロン捕囚からエルサレムへ帰り、復興の中で疲れ果てているユダヤ人たちに、預言者は主の言葉を伝えます。「闇は地を覆い、暗黒が国々を包んでいる」ような現実の中でも、「良い羊飼に知られている羊の幸い、群れの喜び」（李牧師の説教）が、私たちを力付けます。

ヨブ記の最後（42:10-17）で、「主はその後のヨブを以前にも増して祝福された」とあります（→ブレイクの銅版画の中で楽器をもって神を賛美するヨブ）。「神から幸福をいただいたのだから、不幸もいただく」（2:10）と妻に語る生真面目な彼でしたが、試練を通して神と出会い、本当の幸せを知るのです。

Iコリントの最初（1:10-17）で、パウロはコリント教会の中で起こっていた分裂問題に対して、教職者（パウロやアポロ）を教祖化したり、無用化（直接キリストに！）したりせず、「キリストの十字架」を指し示す役目を大切にせよ、と教えます（→洗礼者ヨハネの絵）。

今年、私たちは主の祝福を豊かに受けて、「立てよいざ立て」（讃380番）と歌いつつ、光を放つ教会になりましょう。

2017年1月8日

「わたしたちはメシア—『油を注がれた者』という意味—に出会った。」 ヨハネ1:41

主イエスが荒野でサタンの誘惑と戦い（→マルコ1章）、勝利してから再び登場されたのを見て、洗礼者は自分の弟子たちに勧めて、主に従わせます。

洗礼者は、「二人の弟子と一緒に」いて、「歩いておられるイエスを見つめて（じっと見て）、『見よ、神の小羊だ』と言います（→29節）。自分は行けなくても、弟子たちには従って行かせたいのです（洗礼者なりの終活！）。

弟子の一人であった使徒ヨハネは、その時の様子をリアルに再現します。洗礼者から離れて、「イエスに従った」彼らに対して、主は振り向いて優しく語りかけてくださり、「その日は、イエスのもとに泊まった（つながった→15:1）」のですが、それは「午後4時ごろ」だったと、主の弟子になった若い日の感激を思い返すのです（私たちの場合も！）。

もう一人の弟子のアンデレは、メシアに会った喜びを兄弟ペトロに伝え、彼も主の弟子になり、「ケファ」（岩）と呼ばれます。「キリストは後にペトロに与えるつもり恵みを、はっきりと示しておられるのである。」（カルヴァン）

使徒ヨハネは、自分たちが「メシア」である主に出会い、すぐに従った日のことを思い出しています。主は今も「われに来よ」（讃517番）と招かれます。

2017年1月15日

「もっと偉大なことをあなたは見ることになる。」 ヨハネ 1 : 50

12弟子（→マルコ3:16以下）の中であまり目立たない二人の弟子を、主がどんなに大切にされたか、使徒ヨハネは書き残そうとします（敗者復活戦！）。

主が「ガリラヤ（のナザレ？）へ行こう」として、そこへ近づかれた時、アンデレの友人であった「フィリポに出会って」彼を弟子にされます。彼は「(外国人の多い) ベトサイダの出身」で、誰にでもオープンです。友人のナタナエルに伝道するのも、「ナザレから何か良いものが出るだろうか」と批判的でも、「来て、見なさい」と単純率直に語ります。

主はナタナエル（マルコでは「バルトロマイ」）を見て、彼が「まことのイスラエル人だ…偽りが無い」と称賛されます。「いちじくの木の下にいる」のを見て、そこでイスラエルの救いを祈り、メシアを待ち望んでいる人物だと認められたのです。彼は心を開いて、「あなたはイスラエルの王です」と告白します。

主は彼らの信仰を喜ばれますが、もっと大きな恵みを約束されます。「天が開け…天使たちが人の子の上に昇り降りする」とは、「族長ヤコブの夢に現れたはしごを暗示する」（カルヴァン）もので、誰でも経験できません（→創世記28:12）。

ヤコブのように（→シャガールの絵）、「イエスを知りたる嬉しきこの日」（讃516番）以来、大きな恵みを知るのです。

2017年1月22日

「イエスが、『水がめに水をいっぱい入れなさい』と言われると、召し使いたちは…」

ヨハネ 2 : 7

主イエスはガリラヤに帰り、カナでの婚宴で最初の奇跡をされます。人を楽しくするのを喜ばれる神の御子です。

母マリアが主に「ぶどう酒がなくなりました」と言ったのは、彼女の信仰的な期待でしたが、主は「わたしの時はまだ来ていません」（→12:33）と注意されます（→聖母マリア崇拜）。それでも彼女は「この人が何か言いつけたら、そのとおりに…」と、期待を変えません。

婚宴の席には、ユダヤ教の「清めに用いる石の水がめ」があり、「二ないし三メトレス」（80~120ℓ）入りの大きなものですが、主は召し使いたちに命じて水を入れさせた上で、宴会の世話役に味見させられます。彼は当家の人が「良いぶどう酒を今まで取って置かれた」と言って座を盛り上げます。「見ろ、大食漢で大酒飲みだ」（マタイ11:19）と悪口を言われても、主は喜んでそうされます。

主は「最初のしるし」（→20:30）を示して、神の御子としての「栄光を現され」ます。それを見て、「弟子たちは信じた」のですが、彼らにとって主は、力あるだけでなく優しい御方であります。

「質素と節制の教師」（カルヴァン）と見られる主ですが、「水をいっぱい」入れてぶどう酒にし、「わが喜びわが望み」（讃527番）となってくださいます。

2017年1月29日

「この神殿を壊して見よ。三日で建て直してみせる。」 ヨハネ2：19

主イエスはエルサレムへ行き、神殿から商人たちを追い出されます（→マルコ 11 章）。人々から不信の目で見られますが、救いの業を成し遂げられます。

「ユダヤ人の過越祭が近づいた」時に主は過越の小羊として（→1：29）神殿に行き、「牛や羊や鳩」を不用品として「境内から追い出」し、「わたしの父の家を商売の家としてはならない」とストップさせられます（断捨離！）。主は「熱意がわたしを食い尽くす」（詩 69：10）ような「熱い救い主」です。

ユダヤ人たちは主に、メシアとしての「しるし」を求めますが、主は十字架と復活によって罪の贖いを成し遂げるので神殿は不用になると予言されます。彼らは「この神殿は建てるのに46年もかかった」と自慢しますが（ヘロデがBC20年から始めた大改修）、主は「ご自分の体のこと」を言われたのだと、弟子たちはあとで悟ります（生ぬるさ→黙3：16）。

主がされた奇跡を見て「多くの人がイエスの名を信じ」ました。しかし、「キリストはあれこれの木の根まで知っておられる」（カルヴァン）ので、「彼らを信用されなかった」のです（冷たい心）。

私たちが冷たくても、生ぬるくても、主は十字架にかかり復活して、「恵みの御手をもて」（讃 258 番）救われます。